様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　７ 月　６ 日現在

機関番号：３２７２６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ０２３８７

研究課題名（和文）貫戦期における日中映画交渉史の学際的研究

研究課題名（英文）Interdisciplinary studies of the relationship history of Japanese and Chinese films during the trans-war regime

研究代表者
アン　ニ（Yan, Ni）

日本映画大学・映画学部・特任教授

研究者番号：７０５０９１４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では初年度と最終年度に国際シンポジウムを二度開催し、初年度の成果は「貫戦期の日中映画」と題する特集で『Intelligennce』に掲載されている。二年目には、アンニが岩本憲児との共編で『戦時下の映画　日本・東アジア・ドイツ』(森話社)を刊行し、分担者の川崎賢子が『もう一人の彼女　李香蘭・山口淑子・シャリー・ヤマグチ』(岩本書店)を刊行した。また外国の研究者とのネットワークを構築すべく、二人は海外と国内のシンポジウムや学会で口頭発表を数回行い、日本語、英語と中国語による論文を出版した。三年間を通して本研究は予想の目標が達成でき、他分野と交錯しつつ、テーマを深く究明することができたと思う。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、既成の映画史叙述の空白分野に焦点を絞り、他分野の学術成果を参考に、研究分野を横断しつつ、日中映画交渉を国に跨るアジアの歴史文脈とより広い空間において検証しなおすことを試みた。一次資料であるフィルムの発見と公文書や活字資料の調査に努めた結果、まだ十分とは言えないが、一連の研究成果の公開を通して、日中映画交渉史を新たに構築する基礎を作り上げることができた。また映画というテキストと歴史の断絶や連続との関連性、あるいは俳優の映画における表象とその歴史的実像などに関する研究成果は、学術のみならず、映画史と表象文化のもう一つの捉え方を示し、広く社会に向けて発信できたように思われる。

研究成果の概要（英文）：This project has held two international conferences in the first and the last years respectively, and the research results of the first year have been published in special issue titled as Sino-Japanese Film during the Transwar Regime on Intelligennce. In the second year, two monographs were published. One is Film in Wartime: Japan, East Asia, Germany, co-edited by YAN Ni and IWAMOTO Kenji; and the other is One More Lady: LI Xianglan, YAMAGUCHI Yoshiko, YAMAGUCHI Shirley, Written by KAWASAKI Kenko. In the process of promoting this research project, the communication network of experts and scholars at home and abroad has been built. The members of this project have made oral presentations at seminars or conferences held at home and abroad for several times, and published relevant papers in Japanese, English and Chinese. After 3 years of research, the expected goal has been achieved, and the research has been further studied while the multi-field cooperation has been realized.

研究分野：日中映画交渉史

キーワード：貫戦期　越境　交渉　移動　メディア　大衆文化　インテリジェンス　プロパガンダ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 新たな映画史―日中映画交渉史の再構築

日本における映画史研究は、国別で行われていた成果が多かった。他方、国別の映画通史ではなく、テーマを設定し、日本映画をより広いアジアの空間で新たな視座による研究成果が近年表れ始めた。しかし、日中映画交渉に限って言えば、20 世紀におけるその歴史は長く、映画研究の領域で無視されるか、否定されるか、あるいは日中戦争への協力の度合いと政治宣伝ないし戦争責任の文脈でのみ言及されるかという状況が続いていた。中国の改革開放、冷戦の終結を背景に、日中映画交渉史は映画研究において、重要な位置を占めることになる。そうした二カ国(エリアを含める)の映画交渉史を研究視野に入れる研究者が現れ、2005 年以降、邱淑婷『香港・日本映画交流史　アジア映画ネットワークのルーツを探る』（東京大学出版会、2007）、アンニ『戦時日中映画交渉史』（岩波書店、2010）、劉文兵『日中映画交流史』（東京大学出版会、2016）といった先行研究が生まれ、それらの先駆的な研究である佐藤忠男『キネマと砲声　日中映画前史』（リブロポート、1985）は近年、中国語訳が公刊された。日中両国において、こうして研究の素地は出来上がりつつあると言える。

(2) 日中映画交渉史研究の困難

従来の日中映画交渉史の研究は、残存する希少なフィルムの考察及び表象分析、映画製作過程、配給・上映過程の考察、検閲機構の検証、映画人研究、オーラル・ヒストリー、映画雑誌及び新聞の映画評等の集積と分析などにより進められてきた。しかしながら、政治的変動、社会混乱の中で一次資料であるフィルム媒体が失われ、あるいは現在の研究者に公開できぬところに死蔵されている例が多く、同時代の証言者の高齢化と世代交代、二次資料である活字資料や公文書も情報公開が進んでいるとは言えない。また、アジア地域に点在する広範な中国語文化社会に拡散した映画の行方、それについての鑑賞批評言説、影響及び表象の再検証などについても、空白を埋めることは未だ達成されていないのが、研究の実態だった。

(3) 研究の活路と本研究の可能性

本研究計画を執筆する当時、中国本土の情報公開の見通しはつきにくいが、近年、シンガポールの公文書館は中国語文献に加え英語資料の収集と公開を進めている。これは香港を租借した英国の公文書館から受け入れた史料が充実している点もあり、映画研究にも活用されるべきアーカイブである。日中戦争期の上海映画人の間に冷戦期に香港に転じたものが少なくなかったこと、また香港とシンガポールとの映画製作、配給、公開のネットワークなど、アーカイブ調査によって解明することが期待されている。これは本研究が始められた背景の一つでもある。

(4) Transwar regime による日中映画交渉史の再検討

近年、英語圏における歴史研究の枠組みとして、満州事変以後冷戦終結期に至るまでを Transwar regime として、その連続的変化を考察の対象とすることが提唱されている。邦訳されているだけでも、ルイーズ・ヤング『総動員帝国　満州と戦時帝国主義の文化』（岩波書店、2001）ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』（岩波書店、増補版、2004）、アンドルー・ゴードン『日本の二百年　徳川時代から現代まで』（みすず書房、新版、2013）を嚆矢とし、テッサ・モーリス＝スズキ『過去は死なない　メディア・記憶・歴史』（岩波書店、2014）など、そこで述べられているのは、戦中／戦後に分断された日本一国史観を脱皮する必要性であり、植民地支配・軍事占領の関係性についても宗主国と植民地の一対一対応図式に議論を閉ざすことなく、重層的・多元的に分析する必要性である。本研究はまさに Transwar regime（貫戦期）の枠組みによらなければ扱うことのできない時代と地域およびメディアを対象領域とする。これは映画史研究における新たな試みであり、広く隣接分野研究との共同研究の可能性があると考えている。

２．研究の目的

本研究は、冷戦期における日中映画交渉史の空白を埋め、同時に、資料調査の新たな対象を開拓することを目的とする。日中戦争、新中国成立、冷戦構造の政治状況にあって、形を変えつつも継続性を持った日中映画交渉の成果について、従来の研究のように、映画人と映画の越境及び映画と国際政治の側面から考察するにとどまらず、広く Transwar regime(貫戦期)の文化の諸相と位置づけ、事象の歴史的な相対化を図る。日本及び中国本土における資料発掘の限界について、シンガポール、イギリスなどのアーカイブ所蔵のドキュメント調査と解読を通じて補完し、映画史研究の手法とツールに新たな領域を加える。本研究による資料の発掘と系統化を基盤に、冷戦期日中映画交渉の年表データベース化、失われた映画フィルム探求を試みる。

具体的に言えば、冷戦期における中国映画人の文化的越境の軌跡を掘り起こし、分析考察する。現状では上海から香港への文化人の移動と文化交渉についての研究が先行しているが、台湾、シンガポールも視野に入れ、中国語映画の移動・転移・拡散と日本の映画人との交渉に焦点を当てる。もちろん、1949 年の共産党政権が建立するまで、日本占領下の上海映画との人的交渉、満映と延安から来た映画人を中心に製作されたポスト満映の作品と人的交渉に関する研究を踏まえた上で、本研究はその歴史的意味について、日中映画人のコラボレーションの変容過程、冷戦

期アメリカのアジア地域における文化政策、旧宗主国イギリスとのポストコロニアルな関係性などを考慮に入れ、重層的多元的に分析することに注意を払うべきである。日本と中国における文献資料収集に加えて、シンガポール公文書館、英国公文書館において現地調査を行い、アーカイブ所蔵の日中映画交渉関連資料を洗い出し、リストアップする。冷戦期日中映画交渉史年表、参考文献一覧を作成し、データベース化の基礎、フィルム等文化資源発掘のための研究基盤を構築する。成果については、資料紹介、国内外の学会・研究会における研究報告・発表および研究ワークショップないしシンポジウムの企画、学術的雑誌への論文投稿などにより、学界と社会へ還元を図る。

３．研究の方法

Transwar regime（貫戦期）によって変容と越境を総合的に考察する

これまでの映画史研究は、国策への関与の度合い、プロパガンダとしての影響力を重視するあまり、時代区分、地域を分断して研究を蓄積する傾向があった。しかしながら映画人の軌跡、人脈の継続性、表象の引用関係に着目するなら、たとえば地域を横断して 1930 年代の上海映画、日本映画、そして満洲映画、ハリウッド映画の連関を無視することはできない。また歴史の時間軸に沿って、1930 年代 40 年代の日中映画人の交渉とその成果が、たとえば上海租界の映画界で断絶したのではなく、新中国成立後の時期に、香港映画界でふたたび共通する映画人の才能を糾合して新たな作品を生みだしたことを否定することもできない。学術的にはその越境する映画のネットワークを、人・製作機構・配給制度・観客といった複数の視点から総合的に考察するという課題に答える。冷戦期における日中映画人の交流を通じて製作された映画は、現在ほとんど上映されず、たとえば香港映画における日本映画人の活動などについても、データが確定されていない。本研究では、網羅的な調査と、データの表化、及びその公開を目標とする。文化資源の保存と活用を考慮しても冷戦期の映画フィルムの所在をあきらかにし、発掘の道筋をつけたい。ちなみに日中映画交渉史の実証的研究において、中国語文献のアーカイブの情報公開が進まないこと、中国語映画フィルムが極めて稀少なものになっていることは、世界の研究者の抱える難題であり、いまだに改善の兆しが見られないでいる。しかしながらある程度まで、英語文献によって歴史的実態を再構成し、分析することは可能なはずである。本研究の着想は、日中映画交渉史研究の現状に風穴をあけることになる。また、映画研究のみならず、冷戦期における中国文化の越境と国際的再編を考察する上で、文学、文化、美術、メディア研究など隣接諸分野への波及効果が見込まれる。

本研究は三年間の間に、主に次の方法によって研究計画を進めたのである。

1．従来の日本語文献による研究、中国文献による研究に加えて、香港映画資料館で調査研究を行い、映画フィルムアーカイブで現存のフィルムの検証を行う。

2．Transwar regime の発想による日中映画交渉史の継続性、越境性に共通の関心を抱く日本、中国、香港等の映画研究者及びメディア史、文化史、美術、文学研究者との学際的かつ国際的学術的ネットワークを一部ながら、構築することに努める。

3．国内外の学会、研究集会、ワークショップ等での口頭発表、学術誌への論文発表を通じてコメント、アドバイス、査読を受ける。最初年度と最終年度にシンポジウムを開催する。

4．その他の研究組織との共催による国際シンポジウムを開催する。例えば、清華大学日本研究センター、早稲田大学 20 世紀メディア研究所と名古屋大学星野幸代科学研究費研究グループとの研究連携を作る。

４．研究成果

三年間の研究を振り返ってみれば、当初書いた研究計画と目的はおおよそ達成できたと思う。ただ最終年度の後半にコロナウイルスの感染拡大により、予定していた海外出張に行けなくなり、予定したシンガポールの資料調査も実現しなかったことを遺憾に思う。
年度別の研究成果は下記の通りである。

(1) 2017 度:
冷戦期における日中映画交渉史の空白を埋め、同時に資料調査の新たな対象を開拓することを目的とすると応募時に書いた通り、本課題開始の一年目に本研究は「貫戦期における日中映画『狼火は上海に揚がる』『上海の女』と『白蛇伝』から見る歴史/表象の連鎖と断絶」と題する国際シンポジウムを、早稲田大学 20 世紀メディア研究所の協力の下で開催した。

このシンポジウムは、本研究と関連のあるテーマを研究している国内外の学者を招聘し、映画上映(山口淑子主演『上海の女』)、研究報告と全員討議を行った。本研究のキーワードとなる貫戦期(transwar regime)を中心に報告内容を組んだ結果、戦時、敗戦と戦後の日中映画交渉を一つの連続する歴史的事象として捉え直してみた。映画史研究分野において、貫戦期の視座によるシンポジウムだったと思われる。

招かれた報告者は、交渉史に関わる重要な映画(俳優を含める)テキストに対する分析を通して、これまで検討することのなかった視点を提示し、私たち研究メンバーのみならず、シンポジ

ウム開催当日の多くの来場者にも方法論的に学問の刺激を与えたと考えている。
　その後、シンポジウムでのすべての報告がすぐに文字化され、早稲田大学 20 世紀メディア研究所の『Intelligence インテリジェンス』18 号(2017 年 3 月)の特集「〈貫戦期〉の日中映画」として刊行された。
　代表者のアンニは、2017 年 8 月にポスト満映の所在地である中国の鶴崗に調査に行き、帰国後、調査報告にあたる随筆「ポスト満映史と自分史の旅」(『映画芸術』461 号、2017 年 11 月)を発表。2010 年に刊行された自著『戦時日中映画交渉史』(岩波書店)の中国語版の翻訳を終え、北京大学出版社に提出済み(現在、編集中、2020 年に刊行予定)である。また国立映画アーカイブの依頼で、常設展「日本映画史」解説文の中国語監修を担当した。
　本研究とは別に分担者として参加している科学研究費基盤研究(B)「中国建国前夜のプロパガンダ―・メディア表象―劇場文化と身体芸術のコラボレーション」(代表者:名古屋大学星野幸代)と、同じく科学研究費基盤研究(B)「20 世紀半ばの上海から香港への文化人の移動と文化的越境についての総合的研究」(代表者:関西学院大学西村正男)が共催する国際ワークショップ「移動するメディアとプロパガンダ―抗日戦争期から戦後にかけての芸術文化」(2018 年 3 月 11 日)で司会を務めた。
分担者の川崎賢子は独自の視点による李香蘭(山口淑子)への歴史的分析論考を岩波書店の『図書』で連載という形で発表した。また、川崎は国際学会 The Japanese Studies Association of Australia で Girls Debate: in Aoi Sanmyaku と題する発表を行った。

(2) 2018 年度及び 2019 年度：
　本研究の二年目になる 2018 年には、共同研究活動として、アンニと川崎は戦後李香蘭がショウ・ブラザーズの要請により香港で撮った四本の作品とそれをめぐる資料を調査するために、8 月初旬に香港に赴いた。主に香港電影資料館で関連作品を検証し、関係資料を調べた。
　2020 年 1 月からのコロナ禍により、当初予想した一年の研究目的が完全に達成できたわけではないが、先行研究の空白を埋めるような研究業績を出すことができたと言える。2017 年にアンニと川崎がともに行った香港映画資料館での資料調査に基づいて、川崎は 2018 年度末(2019 年 3 月)に岩波書店より単著『もう一人の彼女　李香蘭/山口淑子/シャーリー・ヤマグチ』を出版した。これは 2019 年度につながる研究成果になり、研究成果を社会に向けて発表する刊行物を下記の通りいくつか出版できた。(1)岩本憲児・アンニ共編著『戦時下の映画 日本・東アジア・ドイツ』(森話社、2019 年 8 月)、(2)西村正男・星野幸代編『アジア遊学特集 移動するメディアとプロパガンダ 日中戦争期から戦後にかけての大衆芸術』(勉誠出版、2019 年 3 月)、李鎮(本研究の主催による国際シンポジウムのゲスト)「建国初期の中央電影局の映画政策」『Intelligence』特集「中国大陸でのメディアと宣伝」に所収(20 世紀メディア研究所刊、2020 年 3 月)が挙げられる。
　また国外内のゲストを招いて次のシンポジウムと研究会を共催した。清華大学日本研究センター・名古屋大学の科学研究費課題(代表:星野幸代)との共催による国際シンポジウム「戦後中日芸術の交渉:継承と展開」(中国清華大学にて、2019 年 10 月 6 日)の他、早稲田大学 20 世紀メディア研究所の定期研究会に参加する形で、中国から招待した研究者が研究発表を行った。
　なお、清華大学シンポジウムの中国語版の成果出版は計画中であり、できれば今年度中に実現できるように努めたい。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計12件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 川崎賢子	４．巻 818
２．論文標題 『私の鶯』とロシアン・コネクション	５．発行年 2017年
３．雑誌名 図書	６．最初と最後の頁 24-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川崎賢子	４．巻 821
２．論文標題 田村泰次郎と彼女	５．発行年 2017年
３．雑誌名 図書	６．最初と最後の頁 32-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川崎賢子	４．巻 823
２．論文標題 上海租界の文化人とインテリジェンス	５．発行年 2017年
３．雑誌名 図書	６．最初と最後の頁 27-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 川崎賢子	４．巻 825
２．論文標題 香港映画の「李香蘭」	５．発行年 2017年
３．雑誌名 図書	６．最初と最後の頁 29-35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アンニ	4．巻 18
2．論文標題 貫戦期における日中映画―歴史/表象の連続と断絶	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Intelligence インテリジェンス	6．最初と最後の頁 4-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川崎賢子	4．巻 18
2．論文標題 映画『上海の女』小論　表象の転移と再編	5．発行年 2018年
3．雑誌名 Intelligence インテリジェンス	6．最初と最後の頁 8-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川崎賢子	4．巻 12
2．論文標題 博多人形がつなぐ夢野久作と江戸川乱歩	5．発行年 2018年
3．雑誌名 センター通信	6．最初と最後の頁 1-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川崎賢子	4．巻 19
2．論文標題 「ヤミ市」文化論書評　眩しい都市	5．発行年 2018年
3．雑誌名 大衆文化	6．最初と最後の頁 93-96
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川崎賢子	4．巻 19
2．論文標題 江戸川乱歩所蔵資料の活用による探偵小説研究	5．発行年 2018年
3．雑誌名 大衆文化	6．最初と最後の頁 97-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 Ni Yan (アンニ)	4．巻 1
2．論文標題 Shanghaifilm-making in the era of the Janpanese Occupation	5．発行年 2019年
3．雑誌名 The Japanese Cinema Book	6．最初と最後の頁 441-460
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 アンニ	4．巻 247
2．論文標題 戦後日本における中国古典の映画化―日本・大陸・香港・東南アジアに跨る大衆文化の記憶	5．発行年 2019年
3．雑誌名 アジア遊学 247 移動するメディアとプロパガンダ	6．最初と最後の頁 150-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 川崎賢子	4．巻 79
2．論文標題 書評　五味渕典嗣著『プロパガンダの文学　日中戦争下の表現者たち』	5．発行年 2019年
3．雑誌名 昭和文学研究	6．最初と最後の頁 152-154
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　5件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 川崎賢子
２．発表標題 Girls Debate: in Aoi Sanmyaku
３．学会等名 The Japanese Studies Association of Australia（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 アンニ
２．発表標題 満映と華北電影
３．学会等名 第七回中国電影史年会（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川崎賢子
２．発表標題 江戸川乱歩における脱異性愛的欲望のゆらぎと変容を探る
３．学会等名 日本近代文学会
４．発表年 2018年

１．発表者名 川崎賢子
２．発表標題 宝塚と戦後日本のミュージカルパネル
３．学会等名 日本演劇学会（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 川崎賢子
２．発表標題 The Significance of Overseas Experiences to Ariyoshi Sawako's Literature
３．学会等名 ASAA(Asian Studies Association of Australia)（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 アンニ
２．発表標題 一九五〇年代の日中映画ー延安、満映、東影、日本
３．学会等名 国際シンポジウム「戦後中日芸術交渉ー継承と展開」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 アンニ
２．発表標題 時空間を超えてつながっている小津安二郎のホームドラマと日本映画史ー『戸田家の兄妹』と『東京物語』を中心に
３．学会等名 小津安二郎全日記中国語版刊行記念シンポジウム（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川崎賢子
２．発表標題 李香蘭再考
３．学会等名 国際シンポジウム「戦後中日芸術交渉ー継承と展開」（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 川崎賢子
２．発表標題 『武蔵野夫人』　空間と場所そして移動する境界
３．学会等名 昭和文学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 川崎賢子
２．発表標題 東アジア冷戦文化研究の最前線:国史的な「戦後」を超えて
３．学会等名 国際日本研究セミナー第2回（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計7件

１．著者名 夢野久作、西原和海、川崎賢子、沢田安史、谷口基	４．発行年 2017年
２．出版社 国書刊行会	５．総ページ数 466
３．書名 定本　夢野久作全集　第2巻	

１．著者名 夢野久作、西原和海、川崎賢子、沢田安史、谷口基	４．発行年 2017年
２．出版社 国書刊行会	５．総ページ数 571
３．書名 定本　夢野久作全集 第3巻	

1．著者名 川崎賢子	4．発行年 2019年
2．出版社 岩波書店	5．総ページ数 249
3．書名 もう一人の彼女　李香蘭・山口淑子・シャーリー・ヤマグチ	

1．著者名 西原和海・川崎賢子・沢田安史・谷口基共編	4．発行年 2018年
2．出版社 国書刊行会	5．総ページ数 485
3．書名 定本夢野久作全集4巻	

1．著者名 西原和海・川崎賢子・沢田安史・谷口基共編	4．発行年 2018年
2．出版社 国書刊行会	5．総ページ数 489
3．書名 定本夢野久作全集5巻	

1．著者名 石川巧・落合教幸・金子明雄・川崎賢子共編著	4．発行年 2019年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 347
3．書名 江戸川乱歩　新世紀　越境する探偵小説	

１．著者名 岩本憲児・アンニ	４．発行年 2019年
２．出版社 森話社	５．総ページ数 362
３．書名 戦時下の映画　日本・東アジア・ドイツ	

〔産業財産権〕

〔その他〕

20世紀メディア研究所 http://www.waseda.jp/prj-m20th/

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	志賀　賢子（川崎賢子） (Kawasaki Kenko) (40628046)	立教大学・文学部・特任教授 (32686)	